

近世後期における江戸庶民の勧進相撲興行見物の実際

谷 釜 尋 徳

Spectating by Edo commoners at Kanzin-Sumo in the later term of Edo period

TANIGAMA Hironori

Summary

The conclusions reached through this research are as follows.

1. In the later part of the early modern period, Ekouin Temple, in the Ryougoku district, was designated as the venue for Kanzin-Sumo. However, part of the reason for this was that the Ryougoku Bridge, which connected the temple with the neighboring area, was expected to provide access to large numbers of travelers, and thus bring many sightseers into Ekouin.
2. The size of the temporary sumo stadium, which was set up whenever performances were held, was 32.4 m wide by 36 m long, for a surface area of about 1166.4 m². Inside the stadium there were roofed “box seats” from which bouts could be easily viewed, and unroofed “floor seating.”
3. The total capacity of the enclosure was approximately 10,000, of which 1,200 sat in box seats while 8,000–9,000 sat on floor seating.
4. During the late early modern period, people of the lower-middle class, which made up the majority of Edo commoners, earned 400 to 540 *mon* per day, of which they would be left with about 100 *mon* after subtracting necessary expenses. Given that watching from a box seat at a Kanzin-Sumo tournament cost around 4000 *mon*, it was not a form of entertainment that would have been easily within their reach. On the other hand, a floor seat cost around 200 *mon*, making it very plausible that even lower-middle class Edo commoners would have been able to spectate.
5. Spectators at sumo performances enjoyed food and drink in the stadium. In particular, audience members in the box seats celebrated victories by wrestlers they were patronizing by throwing their own clothes into the ring, and calling that wrestler to their seat where they would treat him to sake. Also, while the Daimyo of various domains were known to employ wrestlers at Kanzin-Sumo events, in time this practice spread to the common classes. In front of the stadium, wrestlers engaged in practice and this could be viewed free of charge. The research suggests the possibility of people going to the venue to watch the wrestlers practice.

1. はじめに

江戸の儒学者寺門静軒は、『江戸繁昌記』の中で「江都繁華中 太平ヲ鳴スノ具 二時ノ相撲 三場ノ演劇 五街ノ妓楼ニ過ルハ無¹⁾」と述べた。静軒いわく、江戸の三大娯楽とは勧進相撲、歌舞伎芝居、吉原遊郭だというのである。

このうち、歌舞伎および吉原に関しては、常設の芝居小屋や遊郭の存在が年間を通して楽しむことを可能にしており、その繁昌ぶりについて多くの研究成果が上梓されてきた。他方、常設の興行場所を有さなかった勧進相撲興行の場合はどうか。近世娯楽史の分野では、近世後期の江戸庶民²⁾の間で相撲見物が娯楽として人気を博したことが語られ、これが通説的観念として定着してきた³⁾。しかし、従前の相撲史研究において、江戸庶民による相撲興行の観戦行動の実際が明らかにされてきたわけではない。

例えば、近世社会の相撲興行について触れた論稿として、和歌森⁴⁾、竹内⁵⁾、生沼⁶⁾、新田⁷⁾、高埜⁸⁾等の研究をあげることができる。これら諸研究は、江戸の勧進相撲興行の制度的側面については詳論しているものの、その興行を「観る」側の視点から分析する主旨のものではなかった。

この意味で注目すべきは、勧進相撲興行を「スポーツ観戦」という視角から捉えた渡辺の論稿である⁹⁾。本論文において渡辺は、日本では古来より「見せるスポーツ」としての機能を有する年中行事が寺社の祭礼等に取り込まれて存在したと指摘し、とりわけ近世に関しては三都（江戸・京都・大坂）で催された勧進相撲興行でも見物用として棧敷¹⁰⁾や芝居¹¹⁾といった「見るための“しつらえ”」が用意されていたことを明らかにしている。ただし、渡辺の論文は相撲興行を打つ側の経営手法について概説したものであって、具体的な観戦行動の実際に立ち入った検討はなされてい

い。

また、土屋は回向院における勧進相撲に関して、相撲小屋の設置場所や規模、さらには相撲小屋内外の状況にも触れ、従来の研究にはない視点を提供した¹²⁾。しかし、その論旨は江戸庶民と相撲興行との関わりを明確にしようとするものではなかった。

このようにしてみると、従前の近世相撲史研究は、主として相撲興行の運営実態の解明に目を向けてきた感があり、相撲見物を楽しんだ側の視点に立った検討はほとんど行われてこなかったことがわかる。

以上より本稿では、近世後期の江戸庶民による勧進相撲興行見物の実際を把握する試みの一環として、下記の項目について検討を加えるものである。①まず、江戸庶民が足を運んだ相撲小屋の概要を明確にし、②次いで、経済的な側面から、江戸庶民が相撲興行の必要経費に見合うだけの経済力を有していたのかどうかを確かめ、③最後に、種々の条件をクリアして相撲見物を達成した江戸庶民が、実際にどのようにして観戦を楽しんだのかを探ってみたい。

2. 回向院における相撲小屋の概要

2-1 勧進相撲興行の開催場所の検討

江戸の勧進相撲の始まりについては諸説あるが、宝暦13（1763）年刊行の『諸国新撰古今相撲大全』によれば、寛永元（1624）年に四谷塩町において「晴天六日」で開催されたものが嚆矢とされている¹³⁾。その後は、深川八幡、芝神明、浅草大護院、回向院等で開催されてきたが、天保4（1833）年より回向院が定打ちの興行場所となる。開催場所が回向院に定まったのは、その好条件の立地と関係があった。

図1は、近世後期の江戸の主要な寺社を地図上に記載したものである。回向院は両国橋にほど近



図1 近世後期の江戸の主要寺社
安藤優一郎：『観光都市江戸の誕生』新潮社、
2005、p.75より転載。

い所に位置していたが、この両国橋は「江戸市中と墨東（隅田川の東岸）を結ぶメインストリート」¹⁴⁾であったため、常時大量の往来がみられた。

寛保2（1742）年5月12日、修復工事のために両国橋が通行止めとなっていた際、町奉行所は当地を渡し船で往来した人数を調査している。この交通量調査によると、日本橋側から回向院方面へ渡し船を利用した延べ人数は9,576人、逆方面は10,706人で、合計すると1日に20,282人が当地を往来した結果になるという¹⁵⁾。

こうした大量の往来があったため、両国橋のたもとに位置する回向院は集客力を期待されるところとなり、勧進相撲の興行場所として定着していったものと考えられる。また、天保7（1836）年刊行の『江戸名所図会』には、回向院の解説として「諸方より便りよき地なる故殊に参詣多

し」¹⁶⁾と記述されている。この当時、回向院は江戸市中のどこからでもアクセスがよい好条件な土地柄であると認識されていたのである。

次に、回向院境内のどこに相撲小屋が設置されていたのかを探ってみよう。図2は、『江戸名所図会』¹⁷⁾の挿絵のうち回向院境内を描いた鳥瞰図である。境内には所々に茶屋が設けられており、参詣客を相手取った商売が行われていた様子が見受けられる。山門の手前の広場は「両国広小路」と称された火除け地で、江戸市中の一大歓楽街として繁栄した場所でもあった。画中には描かれていないが、広小路のすぐ手前に両国橋が架かっていた。『回向院史』によると、勧進相撲の興行場所は「山門を入った右側」¹⁸⁾の広場であったと記されている。

『江戸名所図会』とほぼ同じアングルから、回向院の相撲小屋を俯瞰した浮世絵が存在する。天保13（1842）年に歌川広重が描いた『東都名所両国回向院境内全図』¹⁹⁾である（図3参照）。この絵画史料によると、先にみたように山門を入った右側の敷地に仮設の相撲小屋が描かれ、山門の横には相撲櫓が建てられている。

また、回向院境内の模様を山門の外から描写した稀有な絵画史料も今に残されている。勝川春英が宝暦12（1762）～文政2（1819）年の期間のどこかで描いたとされる『回向院相撲之図』²⁰⁾である（図4参照）。この史料からは、相撲小屋の位置が一見して判明し難いが、山門を入れて右手側に複数の幟が確認されることから、ここに小屋が建てられている様子が表現されたものと見てよい。

以上より、回向院の相撲小屋は山門から見て境内の右側の敷地に設けられていたことが確かめられる。

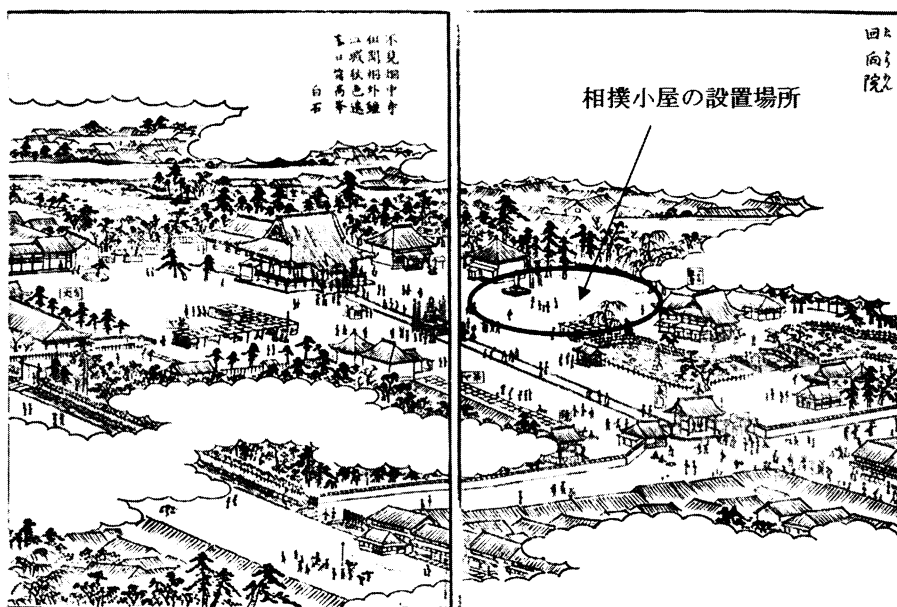


図2 近世後期の両国回向院境内の鳥瞰図

斎藤月岑編・長谷川雪旦画：『江戸名所図会 巻七』須原屋伊八版，1836（国立国会図書館蔵）より転載。

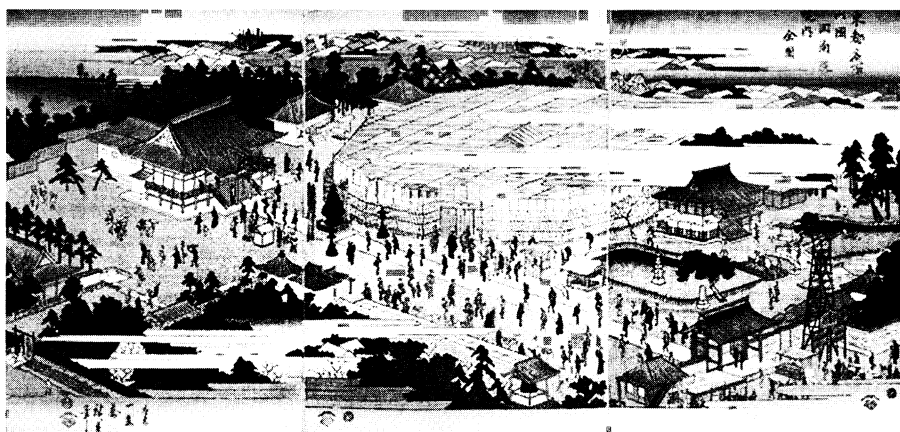


図3 回向院境内における仮設の相撲小屋

歌川広重画：『東都名所 両国回向院境内全図』佐野屋喜兵衛，1842（東京都立図書館蔵）より転載。

2-2 回向院における相撲小屋の規模と構造

上述の検討により，近世後期における回向院の相撲小屋の設置場所が明らかとなったが，この仮設小屋はどの程度の規模と構造をもって建設されていたのだろうか。当時の勧進相撲は，興行運営サイドが寺社奉行に許可を得て開催されるものであったが，その際の書面上の遣り取りが今に残されている。回向院には常設の相撲小屋は存在せ

ず，「場所ごとに小屋を掛けて終われば取りこわす式」²¹⁾であったため，毎回の興行の計画にあたっては，仮設の相撲小屋の建築概要を寺社奉行に申請して官許を得る必要があった。

嘉永3（1850）年の興行にあたっては，「本所回向院境内之内 間口拾八間 奥行貳拾間」²²⁾の規模で相撲小屋の建設が申請されている。境内の空き地に，間口18間（約32.4m），奥行20間（約36

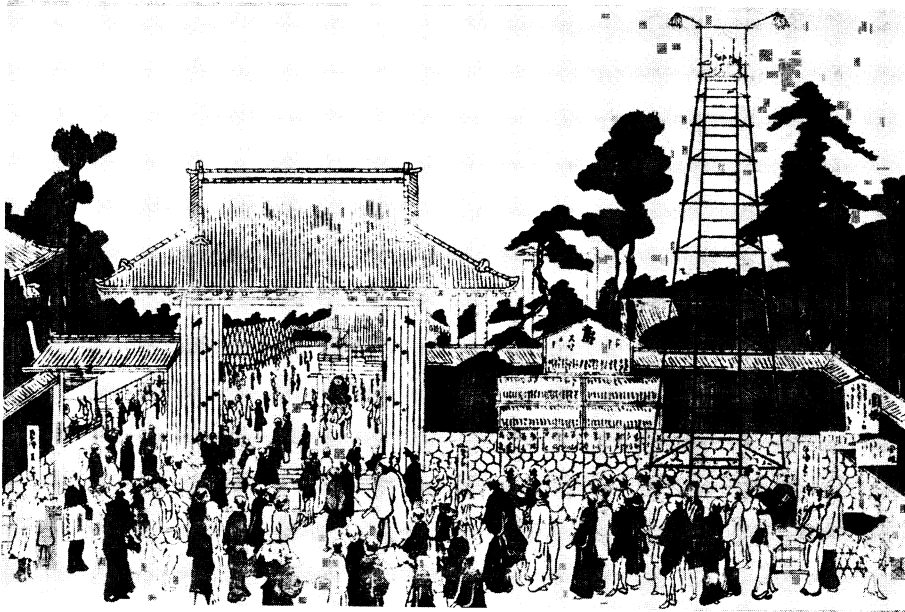


図4 『回向院相撲之図』に描かれた回向院門前からの境内の風景
勝川春英画：『回向院相撲之図』鶴屋，1762～1819（相撲博物館所蔵）より転載。

m), 面積にして約1166.4㎡の仮設小屋を建てるというのである。また、慶応3（1866）年の興行に向けて興行元から申請された文書にも「本所回向院境内之内 間口拾八間 奥行貳拾間」²³⁾とあり，嘉永3（1850）年と同様の規模であったことが確かめられる。

回向院以外で開催された場合をみると，文化10（1813）年春の浅草寺での興行では，相撲小屋の規模は「表間口拾八間 奥行拾七間」²⁴⁾であったという記録が残されている。これによると，間口18間（約32.4m）に奥行き17間（約30.6m）とあり，奥行きこそ多少短くなっているものの，回向院と大きく異なるところは見受けられない。

したがって，近世後期において勧進相撲興行の際に仮設される相撲小屋は，毎回ほぼ同規模であったと理解することができよう。

次いで，相撲小屋の構造について検討したい。先に引用した慶應3（1867）年の興行に向けた申請書類には，回向院境内に建設予定の相撲小屋の図面が添付されている（図5参照）。図による

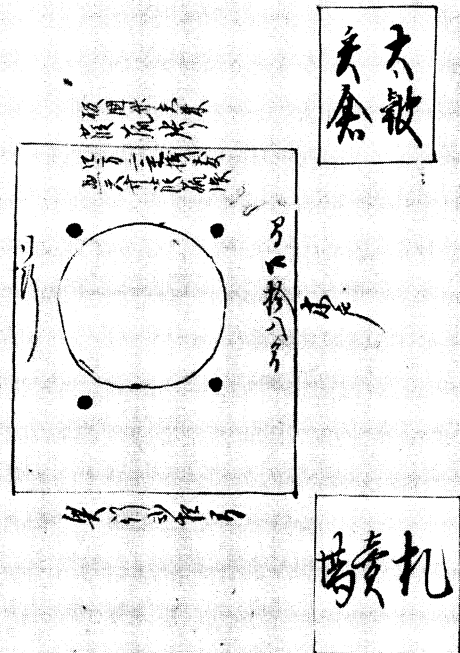


図5 『勧進相撲興行一件』にみる回向院境内の相撲小屋の設計図面

「慶應二年從十二月 勧進相撲興行一件」『寺社奉行一件書類 第41冊（旧幕引継書）』（国立国会図書館所蔵）より転載。

と、間口18間（約32.4m）に奥行20間（約36m）の建物内の正面に土俵と4本の支柱が描かれ、正面には「木戸」が設置されていたことがわかる。

また、木戸の両側には「太鼓矢倉」と「札賣場」が配置されているが、この点については寺社奉行宛の文面にも「太鼓矢倉壹ヶ所 貳間ニ貳間の札賣場壹ヶ所」²⁵⁾と明記されている。「貳間ニ貳間」とあるのは、札売場の大きさが縦2間（約3.6m）横2間（約3.6m）であったことを示すものである。

ところで、図面左上には「板囲竹矢来 葭簾張り 四方二重棧敷 天井葭簾張」²⁶⁾と記されているが、これは回向院の相撲小屋の構造を示す貴重な一文として捉え得るものである。この文面からは、相撲小屋の周囲には板の塀が設けられ、竹を縦横に粗く組んだり（竹矢来）、^{よしず}葭簾を張り巡らして（葭簾張り）、外から取り組みを覗けないような工夫が施されていたことがわかる。また、小屋の内側は四方に二階建ての棧敷席が設置され、二階席の天井は葭簾を張って屋根にするという。

以上の相撲小屋の構造をよりイメージしやすくす

べく、歌川国郷が描いた『両国大相撲繁栄之図』²⁷⁾（図6）を部分的に拡大して掲げておくものである。

先の引用文と図6を照合してみると、周囲二層の棧敷席には屋根はあるものの、その他の観客席（土間席）は全くの屋外であったことがわかる。後述するように、観客の大半は土間席で観戦していたため、雨天時には興行を中止せざるを得なかった。実際に、嘉永3（1850）年の興行では、悪天候が相次いだために「興行仕候而も見物人薄く 渡世二相成不申候ニ付 晴天十日之内五日目限ニ取仕舞申度奉願上候」²⁸⁾として、僅か半分（5日目）の日程を消化した時点での興行打ち切りが寺社奉行に申請されている。

2-3 回向院における相撲小屋内外の模様

以上より、回向院の相撲小屋の規模や構造が明らかとなった。次いで、勧進相撲興行開催中の相撲小屋内外の模様を、近世後期に描かれた絵画史料を通して確かめることにしたい。

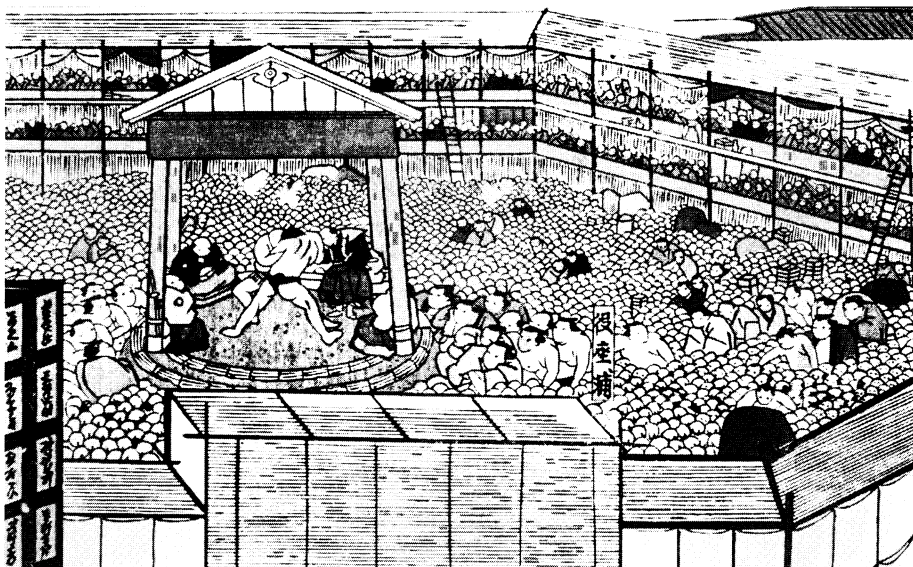


図6 近世後期における回向院の相撲小屋の構造（部分）
歌川国郷：『両国大相撲繁栄之図』大黒屋平吉、1853（相撲博物館所蔵）より転載。

① 相撲小屋の周辺の模様

【札場】

江戸の勧進相撲興行では、観客は木戸銭（入場料）と引き換えに木戸札（入場券）を購入し、それを木戸（出入り口）で手渡すことで相撲小屋に入場することができた²⁹⁾。その際、木戸札を購入するための場所は「札場」ないし「新札場」と称されていた。今日でいうところのチケット売り場である。二代立川焉馬が著した『関取名勝図絵』（1845）には、「新札場 諸見物此所ニて切手（木戸札—引用者注）を買取りて木戸の関を通る」³⁰⁾と解説されている。

図7は、歌川国郷の『両国大相撲繁栄之図』（1853）に描かれた札場を部分的に拡大したものである。観戦希望の観客たちが、札場で群衆をなして順番に木戸札を購入している様子が見て取れる。

明治初頭に来日したスレーダンは、回向院の勧進相撲を見物に訪れた際、札場で木戸札の購入体験を次のように書き綴っている。



図7 『両国大相撲繁栄之図』に描かれた回向院の札場（部分）

歌川国郷：『両国大相撲繁栄之図』大黒屋平吉，1853（相撲博物館所蔵）より転載。

「おもてからこのレスリング場（相撲小屋—引用者注）に入る道は見当たらなかった。日本のレスリング（相撲—引用者注）にはつきものの大きな肥えた年寄りが数人、一段高い台の上に坐っていた。（中略）私たちががっかりしてその年寄りたちを見ていると、車夫の太郎が追付いて来た。そこで私たちのために専用のボックス（棧敷席—引用者注）をとって欲しいと頼んだ。太郎が『ボックスはありません。十銭払って下さい。』というので、三人分の金を払った。彼の言語学上の功績に免じて、一緒に入場させてやることにしたのである。私たちが受取った入場券は長さ十インチ（約25.4cm—引用者注）、幅一インチ半（約3.8cm—引用者注）の木の札だった。」³¹⁾

スレーダン一行が回向院を訪れた当日、相撲興行は満員御礼であったらしく、彼らは棧敷席での見物を止む無く諦めて、土間席で観戦すべく札場で木戸札を購入している。木戸札のサイズは縦が約25cm、横が約4cmで、材質は「木の札」であったという。

【大札場】

木戸札とは別に、「木戸札や木戸銭などの金銭を管理するために設けられた部署」³²⁾が存在し、これを「大札場」と称した。大札場は、札場に集まった木戸銭や、木戸に集まった木戸札の回収業務を担っていた。

その他にも、『関取名勝図絵』が「大札場 毎朝棧敷方土間方へ切手を出す役所也」³³⁾と記しているように、この部署では棧敷や土間で観客の飲食の世話をする係に対して切手を出す役割もあった。図8は、二代歌川国輝の『勧進大相撲繁栄之図』（1866）より、大札場で切手を出している部分を抜き出したものである。前述の『関取名勝図



図8 『勸進大相撲繁栄之図』に描かれた回向院の大札場（部分）

二代歌川国輝：『勸進大相撲繁栄之図』両国大平，1866（相撲博物館所蔵）より転載。

絵』がいうところの「切手」とは、おそらくは入場券たる「木戸札」と同一のものを指していると考えられる。図9の写真に見られるように、勸進相撲の木戸札は「片手で握れるほどの薄い木製の札」³⁴⁾であったとされるが、図8の中の切手とは、まさにこれと同じ形状で描かれているからである。

【太鼓】

相撲小屋周辺において、興行の開催を象徴するものとして「櫓太鼓」があった。前述したように、江戸の勸進相撲興行は寺社奉行の許しを得て開催するものであったが、櫓をあげることは幕府の許可を示す重要な意味合いを持っていた。この点は、冒頭で寺門静軒が三大娯楽の一つに数えた歌舞伎芝居についても同様で、「櫓はその劇場が興行を許され、その権利を保持することの象徴だった」³⁵⁾という。

高々と組まれた櫓の上では太鼓が打ち鳴らされていたが、櫓はこの場所に神を勧請する目印であって、太鼓は興行開始を広く知らしめる機能を果たしていた³⁶⁾。『関取名勝図絵』によると「太

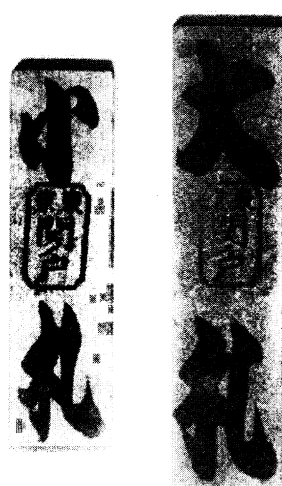


図9 明治期の勸進相撲興行で使用されていた木戸札

日本相撲協会編：『相撲大事典 第三版』現代書館，2013，p. 77より転載。

鼓櫓 毎朝七ツ時より打初メ 夕七ツ時に終る 天下泰平国土安全と打也」³⁷⁾とあり、概ね早朝4時から夕方の4時までの間、天下泰平と国土安全を祈念して打ち続けられていたことがわかる。『江戸繁昌記』にも関連の記述が確かめられる³⁸⁾。

なお、櫓の上で太鼓を叩いている様子は、図10を参照されたい。

櫓太鼓とは別に、翌日からの興行を開始を周知するために江戸市中を触れ回る「触太鼓」が存在した。5つの集団に分かれて各々が担当地域を触れ歩くため「五柄太鼓」とも呼ばれた。

図11に見られるように、触太鼓とは実際には太鼓をぶら下げた棒を担ぎ、打ち鳴らしながら歩くものであったが、比較的多人数の集団が組まれていたようである。『関取名勝図絵』の「五柄太鼓 初日前日に町々へ出る也 江戸太鼓 深川太鼓 品川太鼓 浅草太鼓 四ツ谷太鼓なり」³⁹⁾との記述からは、触太鼓の巡回が五街道の起点である日本橋付近、回向院にほど近い深川、東海道の第一宿場の品川、両国と並ぶ盛場であった浅草、江戸城付近の四ツ谷といった人口が集中する地域を対象

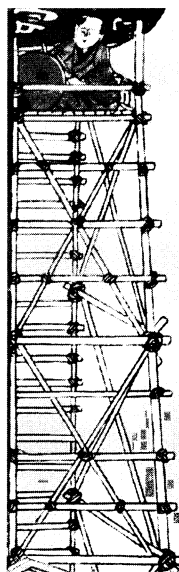


図10 『勧進大相撲繁栄之図』に描かれた
回向院の槽太鼓（部分）
二代歌川国輝：『勧進大相撲繁栄之図』大黒屋平吉、
1866（相撲博物館所蔵）より転載。



図11 『江戸両国回向院大相撲之図』に描かれた触
太鼓（部分）
歌川国郷：『江戸両国回向院大相撲之図』若狭屋与
一、1856（相撲博物館所蔵）より転載。

としていたことがわかる⁴⁰⁾。これによって、江戸
市中の多くの人々が、勧進相撲興行の開催が翌日
に迫っていることを知るところとなった。

【番付】

槽太鼓の下部には、その期間の興行に関する番
付が大判で表示されていたものが設置されてい
た。前掲した図4をみると、番付は回向院境内外
の山門横に設けられていたため、入場料等を支払

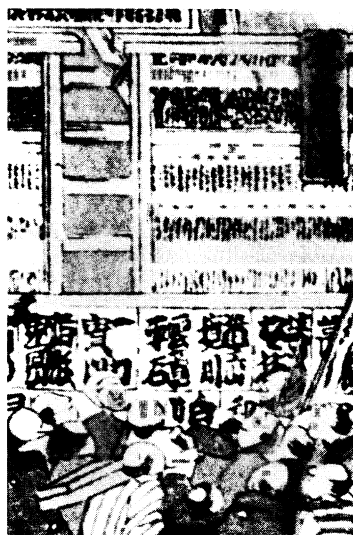


図12 『新板角力尽し』に描かれた番付表を見る
人々の様子（部分）
歌川国郷画：『新板角力尽し』芝泉市、1856（相撲
博物館所蔵）より転載。

わなくとも見ることができた。

図12は『新板角力尽し』⁴¹⁾（1856）に描かれた
番付表に群がる人々の様子である。見物人の中に
は、仕事道具を担いだ者の姿も確認されることか
ら、両国界隈の通りすがりの人々も足を止めて、
番付表を見ることがあったといえよう。

しかしながら、上記の番付表よりも多くの人々
の目に触れたのは、紙媒体で大量に刷られた番付
の方であったと思われる。相撲番付は毎回の興行
に際して発行されたが、これを代々一社で独占的
に請け負っていた版元が三河屋治右衛門であっ
た。『関取名勝図絵』には、興行中の回向院境内
に番付や勝敗結果を印刷する「板木部屋」があっ
たことが記され、当該業務を担う者は「一名三河
屋と云う」と紹介されている⁴²⁾。

番付の発行部数や価格帯は不明で、版元が手に
した利益も定かではない。しかし、番付が出場力
士名と序列を示すだけでなく、江戸市中の不特定
多数の人々に向けて興行の開催を告知すべく刷ら
れていたことは想像に難くない。

図13は、文久2（1862）年2月の相撲番付である。中央上部に「蒙御免」（御免蒙る）とあるのは、前述した通り、勸進相撲興行が寺社奉行の許可を得て開催していることを証明するものである。左下端には、「神田昌平橋外 本郷代地 板元 三河屋治右衛門 同治三郎」⁴³⁾とあり、発行元が明記されている。

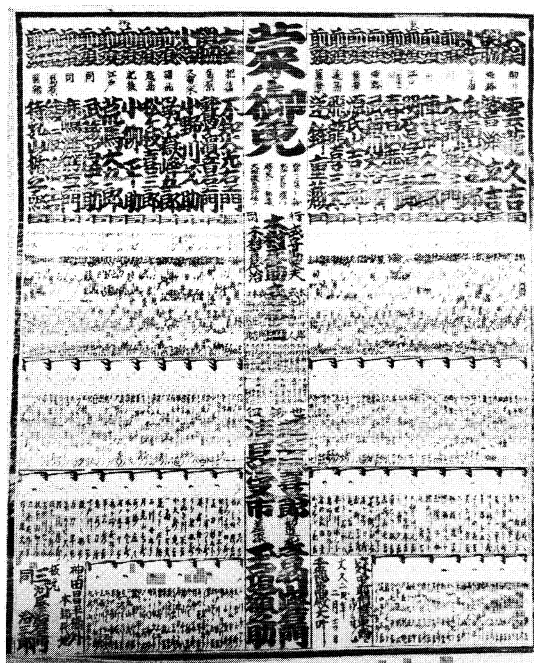


図13 文久2（1862）年2月の相撲番付
『番付』三河屋治右衛門、1862（筆者所蔵）より転載。

② 相撲小屋の場内の模様

上記の検討において、回向院の相撲小屋周辺の風景が明らかとなった。今度は、興行開催中の相撲小屋場内の模様を見ていきたい。なお、本稿が江戸庶民の相撲見物の実際を対象としていることに鑑み、以下では場内での土俵上の取り組みではなく、観客の行動と関わる部分を中心に取り上げるものである。

【木戸】

相撲小屋への入場にあたって、観客が通り抜ける出入りが「木戸」である。前述したように、観客は札場で木戸札を購入した後、これを木戸で手渡して入場する仕組みになっていた。

図14は、『両国大相撲繁栄之図』⁴⁴⁾（1853）に描かれた相撲小屋の木戸部分を部分的に拡大したものである。中央には「大入 客留」の文字が見え、この日の興行が満員御礼の状態であったことがわかる。画中には左右二カ所の木戸口が描かれているが、右手の木戸からは観客が軋げ出ている。左手の木戸では、1人の観客が頭を低くして木戸口をくぐって入場しているが、このように木戸とは観客1人がようやく通れる横幅で頭上も低くなっていたことがわかる。

また、図15は『角觥詳説 活金剛伝』⁴⁵⁾（1814）の挿絵である。これは開場前の様子を描いているため、木戸は閉じているが、木戸のサイズは上述したものと同様のイメージである。相撲小屋の木戸がこのような形状であったことの理由は、どこに求めることができるのであろうか。

『関取名勝図絵』によれば、木戸の役割は「堅固にして切手なきもの 壱人も通す事なし」⁴⁶⁾と表



図14 『両国大相撲繁栄之図』に描かれた回向院相撲場の木戸（部分）

歌川国郷：『両国大相撲繁栄之図』大黒屋平吉、1853（相撲博物館所蔵）より転載。

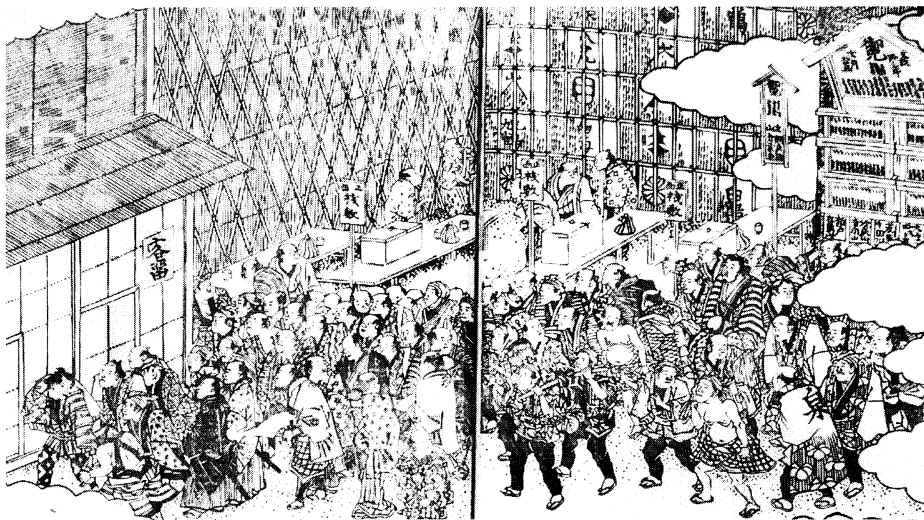


図15 『角舩詳説 活金剛伝』に描かれた回向院相撲小屋の木戸前の様子（部分）
立川焉馬：『角舩詳説 活金剛伝 上』西村屋与八，1814（相撲博物館所蔵）より転載。

現されている。つまりは、木戸の形状は無銭入場者の防止対策の側面をもっていたと考えることができる。図16は木戸の内側の模様を描いたものであるが、ここを通過するためには、木戸札を手渡して酒樽に腰掛けた2人の係員の間を通る必要がある、無銭入場などはそう易々とできるものではなかった。

江戸の古典落語として今に伝わる「角力場」には、下記のような一節がみられ、無銭入場者に対する場内の警備体制が厳重であったことを想起させるものである。

「釈迦が嶽に仁王堂と来ては近年にない大入、札を買っても這入れぬ木戸の込合、仕かたなければ裏へ廻り囲をやぶり犬のやうに這て入りか、つた所内に居る世話やき見つけ『コリヤコリヤそこから這入る所じやない』とあたまを取て押しもどされ得這入らず」⁴⁷⁾

一方、相撲小屋には退場者のみを通す「裏木戸」も存在し、係員も一人が常駐しているのみであったという⁴⁸⁾。



図16 『勧進大相撲繁栄之図』に描かれた回向院の木戸の内側（部分）

二代歌川国輝：『勧進大相撲繁栄之図』大黒屋平吉，1866（相撲博物館所蔵）より転載。

ところで、木戸の役割が無銭入場者の防止にあったとすれば、その形状は幅を狭めることによって解決したものと思われる。それでは、木戸の頭上はなぜ潜らなければならないほどに低く作られていたのだろうか。

このことを知るべく、近世における歌舞伎芝居に手掛かりを求めてみると、「鼠木戸」と称された芝居小屋の木戸もまた、幅が狭められているの

と同時に、高さは身を屈めなければならないほど低く作られる場合があったことがわかる。その理由を、服部は次のように説明している。

「芝居小屋に入り、芝居を楽しむためには、どうしても『くぐる』必要があった。観客は、この狭い木戸口を、身を小さくして『くぐる』ことによって、自分が異次元の人に生まれ変わったことを確信する。」⁴⁹⁾

このように、服部は、身を屈めて木戸を「くぐる」ことを芝居を楽しむために不可欠な一種の儀礼として位置づけている。史料的な裏付けこそないものの、おそらく勧進相撲興行の場合も同様にして、身を屈めて入場する形態の木戸とは、観客に相撲小屋という「異次元」に入り込んだことを意識されるための装置であったと推測しておきたい。

【栈敷】

木戸を通過し相撲小屋に入場すると、観客は「栈敷」か「土間」のいずれかの客席に座ることになっていた。前述したように、回向院相撲小屋の栈敷は周囲二層の構造で、土俵上の取り組みを見物しやすくすべく、土間よりも高所に設けられていた。このことと関わって、近世芸能興行史の権威者である守屋は栈敷を「特別席」と位置づけている⁵⁰⁾。栈敷は1間につき収容可能な人数が定められていたが、回向院相撲小屋の場合は1間につき8人詰めであったという⁵¹⁾。

図17は、両国回向院における勧進相撲興行を描いた『勧進大相撲土俵入之図』⁵²⁾ (1859) より栈敷席を部分的に拡大したもので、図18は同じく回向院相撲小屋の栈敷席の一階部分を描いた『新板角力尽し』 (1856) である。いずれも、画中には観客が口にする酒や弁当箱等が確認でき、酒食の

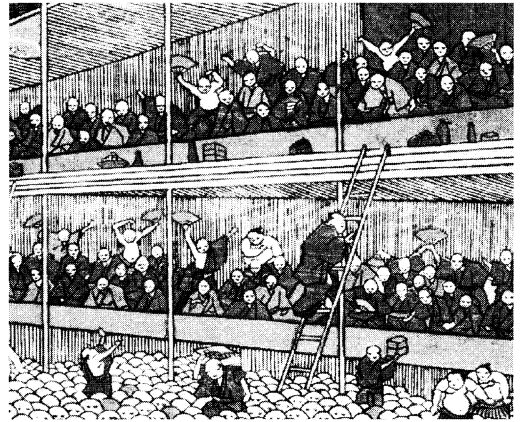


図17 相撲小屋の栈敷席における観客の酒食の様子 (部分)

一恵斎芳幾画：『勧進大相撲土俵入之図』丸屋鉄次郎，1859（国立国会図書館蔵）より転載。



図18 『新板角力尽し』に描かれた栈敷席の観客の様子

歌川国郷画：『新板角力尽し』芝泉市，1856（相撲博物館蔵）より転載。

世話をする場内の係員の姿も描かれている。なお、観客は栈敷と土間の昇降に梯子を使用しているが、これは元治元（1864）年に訪日したスイス人のアンペールによる「栈敷は竹の簡単な梯子で平土間と連絡している。」⁵³⁾との見聞録と符合するものである。

【土間】

相撲小屋には栈敷席の他にも、一般大衆のための「土間」席が設けられていた。土間席は栈敷席のように定員があったわけではなく、土俵から周囲の栈敷までの間に可能な限り観客を詰め込む「追い込み席」であったため、観客は密集状態での観戦を余儀なくされた。図19は『東都歳事記』⁵⁴⁾に掲載された回向院相撲小屋の挿絵を、土間に焦点を当てて拡大したものである。土俵周辺で食い入るように観戦する人々の姿が描かれ、土間の賑わいを看取することができる。『関取名勝図絵』は、土間を海に例えて「見物浪を打也 大入の時ハ大波一面に打事おびた、し」⁵⁵⁾と表現している。

こうした土間席の賑わいは、日本を訪れた外国人の見聞録によっても垣間見ることができる。前出のスレーダンは、木戸を通過して場内を一見した際の印象を以下のように日記に書き留めている。

「高さが三フィート（約91cm—引用者注）ほどある舞台の下の戸をくぐって、中にはいると、全く不愉快な光景に出会した。どう見ても、立

錐の余地もない程だった。ボックス（栈敷—引用者注）はすべて塞っているどころか、目白押し、平土間といえ、労働者たちが一杯詰め込まれて、とても見られたものではない。」⁵⁶⁾

スレーダンの見聞によると、相撲小屋の場内は栈敷も土間も観客で埋め尽くされ、とりわけ土間には「労働者たちが一杯詰め込まれて」いたという。ゆえに、土間席は「労働者」すなわち一般庶民をターゲットとした座席であったと類推されるものである。

なお、『関取名勝図絵』は土間で観客の飲食の世話をする「中売」について触れ「手ぬぐひにてたすきを掛け、人の肩を踏て商ひをなす」⁵⁷⁾と説明するが、その模様は絵画史料を通して知ることができる。図20および21は、それぞれ『江戸両国回向院大相撲之図』（1856）と『新板角力尽し』（1856）に描かれた土間席で働く中売の模様である。まさに、「人の肩を踏て」酒や重箱を担いで商売をしている情景を確認することができる。



図20 『江戸両国回向院大相撲之図』に描かれた土間の中売（部分）

歌川国郷：『江戸両国回向院大相撲之図』若狭屋与一、1856（相撲博物館所蔵）より転載。

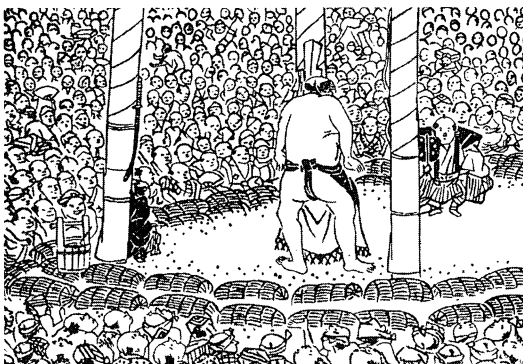


図19 『東都歳時記』に掲載された土俵周囲の土間席の模様（部分）

斎藤月岑：『東都歳事記』『日本名所図会全集 東海道名所図会下巻 東都歳事記全』名著普及会、1975、p.245より転載。

2-4 相撲小屋の収容人数

近世後期における相撲小屋は、どれだけの観客が収容可能だったのであろうか。そのことを知る

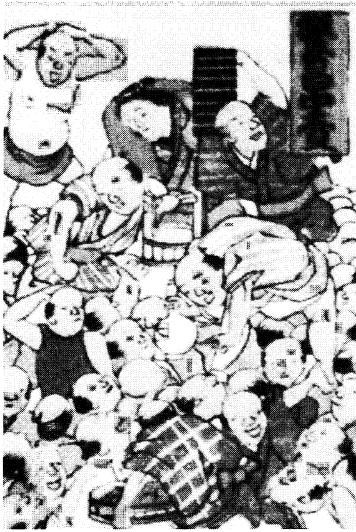


図21 『新板角力尽し』に描かれた土間の中売（部分）
歌川国郷画：『新板角力尽し』芝泉市，1856（相撲博物館所蔵）より転載。

ための史料として、ここでは『藤岡屋日記』を取り上げたい。同史料は江戸神田の古本商の須藤（藤岡屋）由蔵が、近世後期の江戸市中の出来事を詳細におよんで編年的に記録したもので、当時の世相を窺い知ることができる。

『藤岡屋日記』の安政3（1856）年の記事には、相撲小屋に関して次のように記録されている。すなわち、「大相撲十一月廿九日，初日 当相撲大当り，大入にて六日目には壱万三百十三人入有之候よし。五日目札数九千枚，出茶や棧敷にて一万余にて，客留也。」⁵⁸⁾とある。安政3（1856）年11月に回向院境内で開催された秋場所は，6日目には10,313人が入場し，その前日の5日目は合計10,000人余りの来場をもって「客留」となったという。この記事の内容に従えば，相撲小屋の収容人数の上限は約1万人であったことになる。

また，高埜の研究によると，相撲小屋の総収容人数のうち，棧敷席の定員は合計で約1,200人であったという⁵⁹⁾。したがって，総収容人数の約10,000人から棧敷席の約1,200人を差し引くと，

土間席には残りの8,000～9,000人が密集状態で観戦していたと推測される。

3. 経済的側面からみた江戸庶民の勧進相撲興行見物の実際

3-1 江戸庶民の経済事情

江戸庶民が勧進相撲興行を見物するにあたっては，見物料たる「木戸銭」を支払う必要があった。こうした貨幣を媒介とする行為を理解するためには，庶民の生活史の視点から日常の収入および支出を明らかにし，彼らに相撲見物に興じるだけの経済的余力があったのかどうかを確かめなければならない。そこで以下では，この点を勘案して江戸庶民の大半を占めた中下層の商人および職人の経済事情を紐解くことにしたい。

なお，ここでは貨幣の交換率を「金1両＝銀60匁＝銭6000文」⁶⁰⁾とし，近世後期頃の市場相場で計算するものである。

文政期（1818～30）頃の世相を描いたとされる『文政年間漫録』には，その日稼ぎの生活を営んでいた中下層の商人の一例として，江戸の裏長屋の住人を主な担い手とする棒手振⁶¹⁾の収入に関する記述が確認できる⁶²⁾。同書が取り上げているのは野菜を販売する棒手振であるが，彼は毎日仕事から帰ると米代として200文，味噌・醤油代として50文，子供の菓子代12～13文をその日の稼ぎから取られ，残金は100～200文程度であったという。支出と残金の合計額からみれば，棒手振に代表される中下層の商人の日収は400文程度であった計算になる。ただし，同時代に記された『柳庵雑筆』によると，棒手振の余剰金は「積て風雨の日の心充てにや貯ふるらん。」⁶³⁾とあるように，天候不良で商売が立ち行かない場合に備えて貯金する必要があったという。

一方，江戸の職人の中で最も多くの割合を占めた業種は大工であったといわれるが⁶⁴⁾，『文政年

間漫録』には大工の収入に関しても触れられている⁶⁵⁾。同書によれば、文政期頃の大工の日収は飯料込みで銀5匁4分(540文)であったという。また、大工の生活における毎月の支出は、店賃(家賃)が10匁(1000文)で、食費は夫婦に子ども1人として約30匁(3000文)、調味料と薪の代金が合わせて58匁(5800文)、その他に道具代、家具代、衣装代等の諸々を含めると月々の総支出額はおよそ128匁(12800文)であったと記されている。これを便宜的に30日間で割って、1日当たりの支出額を銭単位で計算すると約420文となる。先の収入から支出を差し引くと、1日につき100文強の余剰金が生じた計算になる。

このように、『文政年間漫録』からみると、中下層の江戸庶民の日収は概ね400~540文程度で、支出額を差し引いた残金は100文程度であったといえる。ただし、ここで見た棒手振と大工は、いずれもある程度天候に左右される職種であったことからすれば、実際には毎日定額の収入を手にしていたとは限らない。

ところで、文政11(1828)年の幕府の調査記録『町方書上』によれば、江戸の店借比率は約70%であったとされるが、店借人の圧倒的多数は裏店借層であり、江戸庶民といえば彼ら裏長屋の住人達が中核をなしていたという⁶⁶⁾。この裏店借の職種を『世事見聞録』に尋ねてみると、そこには「裏店借り、端々町屋住居の族は、青物売り・肴売り・すべて棒振りと唱ふるもの、日雇取り・駕籠舁・軽子・牛牽き・夜商ひ・紙屑買ひ・諸職手間取り等…」⁶⁷⁾とある。長屋の住人の多くは、棒手振や職人であったことがわかる。このことから、前述した棒手振りや職人に関する記述は、江戸庶民のうち少なくとも7割程度の生活実態を反映していると考えることができよう。

上記の検討においては、手掛りとした史料が限定されているため、算出された数字は参考程度に

しかなり得ない。それでも、この程度の経済力を中下層の江戸庶民の一般的な傾向と仮定した場合、彼らにとって勧進相撲興行はどのような位置づけにあったのであろうか。以下において検討していきたい。

3-2 勧進相撲興行見物の必要経費

ここでは、近世後期における江戸の勧進相撲興行見物にかかる必要経費を紐解き、先に見た中下層の江戸庶民の経済事情と照らし合わせるものである。まずは、勧進相撲を見物するための必要経費の中で、最も多くの割合を占めたと考えられる見物料について明らかにする。

近世の江戸における大衆芸能を取り上げた川添は、「どの客層がどこにあらわれるかは、それぞれの芸能における料金の違いと深く連関していた。」⁶⁸⁾と説く。この見解を勧進相撲興行に当て嵌めて考えてみると、「客層」と「料金」との関連性は観客席によって見出すことができる。すなわち、既述のように相撲小屋の観客席には棧敷と土間があったが、両者の料金設定には大きな差異が認められるため、興行元がターゲットとした客層も自ずと異なっていたと考えるからである。そこで以下では、棧敷と土間の見物にかかった経費を各々検討することにした。

① 棧敷の必要経費の検討

近世後期の江戸における勧進相撲の棧敷代を証かす史料は、管見では確認し得ていない。そのため、ここでは京都および大坂の事例を引き合いに出すものである。

元禄13(1700)年に開催された京都岡崎神社の勧進相撲について、『大江俊光記』は「棧敷六十三間、壹間二帖敷三十五匁、」⁶⁹⁾と記し、棧敷の料金設定が1間につき35匁(3500文)であったことを伝えている。

また、元禄期（1688～1704）頃の世相を伝える『摂陽見聞筆拍子』⁷⁰⁾によれば、大坂にて元禄15（1702）年に開催された勸進相撲興行の棧敷席の木戸銭は43匁（4300文）であったという。もちろん、この値段が近世後期に至って大きく変動していた可能性も否めず、京坂と江戸との間で棧敷代の地域差が生じていたことも想定される。それでも、冒頭で寺門静軒が江戸の相撲興行と同等の娯楽として数えた江戸の歌舞伎芝居についてみると、棧敷席の値段は幕末期には40～60匁（4000～6000文）程度であったことが確かめられ⁷¹⁾、京坂の相撲興行と近似した金額であったことがわかる。ゆえに、本稿では、近世後期の江戸における勸進相撲興行の棧敷席の値段は、概ね4000文前後であったと仮定しておきたい。

このように、勸進相撲興行を棧敷席で見物するためには、4000文を超える金銭が必要とされたが、先にみた中下層の江戸庶民の収入と照らし合わせてみると、これは彼らが容易に捻出できる金額ではない。彼らが手にした余剰金は日額で100文程度であったが、相撲見物を1回達成するための目標額を4000文と見積もると、余剰金をすべて貯蓄に回したとしても、満額まではおよそ40日間かかる計算となるからである。したがって、経済的な側面からみると、棧敷席での勸進相撲興行見物は、中下層の江戸庶民にとって高価な娯楽であり、頻繁に体験できる機会は得られなかったといわねばならない。

ただし、守屋が「棧敷は『間』を単位に構え、芝居（土間一引用者注）は『人別』に席料を払うものであった。」⁷²⁾と指摘するように、上記の棧敷席の値段は1間を単位とした金額であって、これを必ずしも個人で負担する必要はなく、人数で割ることも可能であった。

和歌森によれば、近世後期の回向院相撲小屋の棧敷席は1間につき8人詰めであったという⁷³⁾。

そこで、上記の棧敷代（4000文）を人数（8人）で割ると、1人あたりの負担額はおよそ500文となる。それでも、中下層の江戸庶民が日ごとに手にした余剰金（約100文）の5日分であることを考えると、棧敷席での相撲見物は彼らにとって日常的に容易に手が届く娯楽であったとは言い難い。つまりは、興行側からすれば、棧敷席のターゲットとする客層は中下層の庶民ではなく、一部の富裕層であったと見ることができそうである。

② 土間の必要経費の検討

一方、土俵周囲に密集した状態で観戦する「土間席」の料金はどのように設定されていたのであろうか。江戸の勸進相撲における土間席の料金を証かす史料は管見では見当たらないが、前述の『大江俊光記』には、元禄13（1700）年における京都岡崎神社の勸進相撲における土間席の木戸銭を3匁（約300文）であったと記録されている⁷⁴⁾。また、会津若松城下で開催された巡業の木戸銭は、天明7（1787）年の興行で130文、天明9（1789）年の興行で135文であったという⁷⁵⁾。さらに、明治初期に回向院の相撲興行を土間で見物したスレーダンの見聞録によると、彼ら一行は3人分として10銭（600文）を支払っており⁷⁶⁾、この興行では土間席が1人あたり200文程度であったことがわかる。

このように、江戸の興行における土間席の値段は棧敷席の場合よりもかなり安価に抑えられていたと想像することができよう。前述した中下層の江戸庶民の経済事情からしても、土間席の値段は彼らが無理なく観戦できる範囲にあり、その意味では土間席は江戸の7割を占めた中下層の一般庶民をターゲットとしていたと捉え得るものである。

ところで、以上のような入場料の他にも、無事に相撲小屋への入場を果たした暁には、場内で飲

食を楽しむ経費も必要であった。そのことは、近世後期における江戸の相撲小屋場内を描いた絵画史料によっても知ることができる(図17, 18, 20, 21)。『関取名勝図絵』によれば、相撲小屋の場内で販売されているメニューは、「弁当 すし 酒 するめ かまぼこ くだもの」⁷⁷⁾であったという。

幕末期に執筆された百科事典『守貞漫稿』によれば、当時の江戸における飲食の値段は、例えば鰻蒲焼16文、甘酒8文、そば16文、汁粉16文等々であったとされている⁷⁸⁾。相撲小屋の中では若干の割高で販売されていた可能性は否めないにしろ、場内での飲食は中下層の江戸庶民の経済事情を著しく圧迫するものではなかったと推察されよう。

4. 江戸庶民による勧進相撲興行見物の実際

4-1 棧敷席における相撲興行見物の実際

ここでは、近世後期の江戸庶民が勧進相撲興行をどのようにして楽しんだのかを検討することにした。寺門静軒の『江戸繁昌記』には、場内での楽しみ方を知る手掛かりとして、下記のような記述を確認することができる。

「槽鼓(槽太鼓—引用者注)寅時枹ヲ揚ケ 連撃辰ニ達ス 観ル者辱食(寢床での食事—引用者注)而往ク 力士対ヲ取テ場ニ上ル(中略)勝敗未分ル之間タ 鼯眞為メニ憤リ 徒ラニ虚勢ヲ張ル 髪ハ頭上ノ手巾(手拭い—引用者注)ヲ衝キ 手ニ兩把ノ熱汗ヲ捏ル 腕ヲ扼シ 齒ヲ切ハリ 狂顛自ラ覚ヘ不 扇揚レリ 一斉喝采之声 江海(江戸湾—引用者注)翻覆ス 各々物を擲テ纏頭(祝儀—引用者注)ト為ス 自家ノ衣着 浄々投ケ尽シ甚シ 或ハ傍人ノ短掛ヲ褌フニ至ル」⁷⁹⁾

上記引用文は、庶民の相撲見物の模様を時系列で記述したものと捉えることができる。まず、現在の午前4時頃から午前8時頃までの間、相撲槽で太鼓が断続的に打ち鳴らされ、相撲見物に出向く者は早朝に寢床で食事を取って両国へと出発する。東西の力士が土俵に아가って取り組みがはじまると、観客は相撲見物に没頭し、勝敗の軍配が下されるまでは鼯眞の力士に声援を送り虚勢を張る。頭には手拭いを巻き付け、両手には汗を握っている。腕を捲って齒を食いしばり、皆まるで氣が狂ったような状態となる。

行司の軍配が上がると、江戸湾(東京湾)がひっくり返るような歓声が一斉に場内に轟く。その後、観客はそれぞれ祝儀として物を土俵に投げ入れる。自分の着物を脱いで投げ尽くしてしまう者もあるし、周囲の者の着物を奪い取る者もいたという。このことについては、『関取名勝図絵』にも関連の記述が見られ、棧敷席の様子は「見物山をなして勝角力に衣類の花をちらす 手を打悦びの声をあげること雷の如し」⁸⁰⁾であったとしている。

この棧敷席での行動は「投げ纏頭^{はなづか}」と称されるもので、『相撲大事典』には次のように説明されている。

「ひいきにする力士が勝ったとき、客が土俵に羽織や煙草入れを投げ入れて祝儀としたこと。江戸時代から明治時代までの習慣で、これらを呼出が拾って力士に届け、力士の付け人が投げ主に届けると代わりに祝儀をくれた。羽織などに投げ主の名前が書いてあったという。」⁸¹⁾

こうして鼯眞の力士に対して祝儀を出す行動は、金銭的にゆとりのある棧敷席の観客ならではの相撲興行の楽しみ方であったといえよう。

以上より、勧進相撲興行に対する人々の熱狂ぶ

りが看取されるが、とりわけ勝敗決定後の「投げ纏頭」については、歌川国郷が描いた『江戸両国回向院大相撲之図』⁸²⁾ (1856) によっても知ることができる。図22は当該絵画史料のうち栈敷席の様子を描いた部分であるが、『江戸繁昌記』の記述と同様、多くの観客が頭に手拭いを巻き、着物を脱いで土俵に向かって投げ入れ、褌一枚の状態で騒ぎ立てているからである。

また、酒を飲んでいる客の姿もみられ、前述したように飲食を楽しみながら観戦していたことがわかる。さらに、画中正面には力士と見られる大柄な男が飲食をしている様子が描かれている。このことから、栈敷席の観客は最員の力士を栈敷に上げて酒食を振る舞う風習があったと読み取ることができよう。

これまでに取り上げたのは栈敷席に座る観客の楽しみ方であったが、栈敷席の収容定員は相撲小屋全体のおよそ1割に過ぎない。したがって、今後の課題としては、見物客の大半を占めた土間席の庶民がいかにして相撲見物を楽しんだのかを明確にすることがあげられる。

4-2 庶民層による力士の召し抱え

近世の勧進相撲においては、諸藩の大名が力士を召抱えることが頻繁に行われた。近世初期には、藩による力士の召し抱えは武術奨励の意味合

いが含まれていたが、元禄期(1688～1704)以降は雄藩の対抗意識のもと力士は所属先の藩の広告塔として活躍することが義務付けられた。

とりわけ、多くの力士を抱えて江戸・京都・大坂の勧進相撲で隆盛を極めたのが松江藩で、松江藩のお抱え力士が出場しなければ興行が成立しない程であったといわれる。かの雷電為右衛門⁸³⁾も松江藩が召し抱えた力士の一人であった。

文化元(1804)年3月末～4月にかけて催された神田明神での興行は、松江藩の力士が不参加であったために客の入りが悪く140両の赤字を出す事態となったが、同じ頃に彼ら一行が巡業で訪れた川越の興行では、実に210両の利益が上がったという⁸⁴⁾。

大名の側としても、お抱え力士の勝敗は藩の力を世間に誇示する重要な指標と捉えていた。高砂屋浦舟の回顧録『江戸の夕映』によると、「東西の力士は多く諸侯のお抱へて触太鼓の廻る翌日から諸家のお家来は栈敷にて見張りをなし場外には数頭の乗馬を繋ぎおきお抱へ力士の勝敗は一々早馬にて御本邸へ注進する」⁸⁵⁾とあり、勧進相撲への参画が藩を上げての一大イベントであったことがわかる。

こうした力士の召し抱えは、時代が下るに連れて庶民層にも普及していった。そのことは、正徳元(1711)年に幕府が江戸市中に発布した下記の



図22 『江戸両国回向院大相撲之図』に描かれた勝敗決定後の栈敷席の模様(部分)
歌川国郷：『江戸両国回向院大相撲之図』若狭屋与一、1856(相撲博物館所蔵)より転載。

禁令によっても知ることができる。

「市井にて角力者をめしか、へ會集し。そのわざをなさしむるよしきこゆ。實にそれらのものめしか、へ置にはあらで。(中略)市人に似つかはしからざる事なれば。この後さる事なすべからずとふれらる。」⁸⁶⁾

この禁令は、一見すれば、庶民が幕府から抑えつけられていた感を抱かせるものである。しかし、視点を転じて「禁令のあるところには必ずそれに対応する事実がある」⁸⁷⁾という史料批判の原則を考慮すれば、この禁令の発布をもって、庶民層が力士を召抱えて楽しむことが頻繁に発生していたと解釈することも可能であろう。幕府によって禁令が発せられるということは、当該の現象が規制の対象となるほどに活発化していたことを裏付けていると考えられるためである。

現に、先に転載した図22には、栈敷席に最員の力士を招いて酒食を振る舞う様子が確かめられる。したがって、本稿においては江戸庶民の中でも富裕層に関しては、力士を召抱えて楽しむことがあったと類推しておきたい。

4-3 賭け事

これまで検討してきたように、江戸の勧進相撲興行が活況を呈した背景には、相撲の勝敗が賭博の対象となっていた事実があったことは言うを待たない。勧進相撲に関する賭博の存在については、前出の高砂屋浦舟も「場の内外にて勝負の賭は盛んなものでした」⁸⁸⁾と回顧している。

また、幕末期に訪日したアンペールも以下のような見解を示していることから、当時の勧進相撲に賭け事がつきものであったことを改めて知ることができる。

「相撲競技は、まさしく日本民衆にもっとも古くから愛好されている娯楽に違いない。だが、日本人の好むいろいろな見世物の魅力の中には、賭がその大きな部分を占めているからこそ熱狂することを見逃すわけにはゆかない。日本人には競馬の制度がないが、その代り、力士の部族がつくった集団と集団〔東の方西の方一記者注〕の間で行なわれる競技の勝負に賭けることを考え出した。」⁸⁹⁾

勧進相撲に関する賭博の賭け金は不明であるが、小額でも参加できるものであったとすれば、中下層の江戸庶民の中にも相撲の勝敗を賭博と絡めて楽しんだ者は多数いたと考えてよからう。

4-4 地取観戦

相撲小屋の内側での取り組みとは別に、木戸の外で稽古を観衆に披露することを「地取」と呼んだ⁹⁰⁾。図23～25は、各種の絵画史料において地取を描いた部分を抽出したものである。

無論、相撲小屋の外で行われる地取を見物する



図23 『勧進大相撲繁栄之図』に描かれた地取（部分）

二代歌川国輝：『勧進大相撲繁栄之図』両国大平，1866（相撲博物館所蔵）より転載。



図24 『両国大相撲繁栄之図』に描かれた勝敗決定後の栈敷席の様様（部分）
歌川国郷：『両国大相撲繁栄之図』大黒屋平吉，1853（相撲博物館所蔵）より転載。



図25 『江戸両国回向院大相撲之図』に描かれた地取（部分）
歌川国郷：『江戸両国回向院大相撲之図』若狭屋与市，1856（相撲博物館所蔵）より転載。

ことは木戸銭徴収の対象とはならなかったため、貴賤を問わず楽しむことができたといっていよい。だとすれば、相撲小屋に入場して取り組みを楽しむ経済的余裕がない庶民の中には、地取の観戦を目的に興行の開催場所まで足を運ぶ者がいた可能性もあり得る。

5. おわりに

本稿における検討の結果は、以下のように整理することができる。

1. 江戸の勧進相撲の興行場所は、近世後期には両国の回向院境内に定まったが、それは付近に架かる両国橋が大量の往来人の輸送機能を有し

ていたことから、回向院に多くの見物客が流れ込むことを期待されたためでもあった。実際の興行場所は、回向院境内の山門を潜り参道を直進した右手の敷地で、ここに毎回の興行のたびに仮設の相撲小屋が建設されていた。

2. 江戸の興行では、年間2回（各10日間）の開催の度に寺社の境内に相撲小屋が仮設されていた。その規模は概ね間口18間（約32.4m）、奥行20間（約36m）、面積にして約1166.4m²程度に定着していた。相撲小屋の内部には観客席として、四方に観戦しやすい屋根付きの「栈敷席」を巡らせ、1階のフロアには屋根のない「土間席」が設置されていた。また、相撲小屋

の周辺には、札売場（チケット販売所）、木戸（入場口）、大札場（管理事務所）、櫓太鼓、番付表示板等々が設置されていた。

3. 回向院相撲小屋の総収容定員は約1万人であったが、棧敷席の定員は合計約1,200人であったため、総収容定員から棧敷席の分を差し引くと、土間席には残りの8,000～9,000人が密集状態で観戦していたことが確認された。勧進相撲興行の開催日数は1回につき10日間、収容人数は約1万人であったため、1回の興行で延べ10万人が見物可能であった。
4. 近世後期において、江戸庶民の大半を占めた中下層の人々の日収は400～540文程度で、そこから必要経費を差し引いた余剰金は100文程度であった。勧進相撲興行の棧敷席の値段が4000文程度であったことから、棧敷席での相撲見物は彼らにとって容易に手が届く娯楽ではなかった。一方、土間席の木戸銭は200文程度であったため、中下層の江戸庶民もこの席での観戦は十分に可能であった。
5. 相撲興行に訪れた観客は、場内で飲食を楽しみながら、時に賭博を伴うかたちで相撲見物に没頭していた。とりわけ、棧敷席の観客は、鼯鼠の力士が勝利した際に祝儀を与えるべく、着用していた衣類を土俵に投げ入れたり（投げ纏頭）、鼯鼠の力士を棧敷に上げて酒を振る舞うこともあった。また、近世の勧進相撲では、諸藩の大名が力士を召抱えることが頻繁に行われたが、この現象は時代が下るに連れて庶民層にも普及していった。相撲小屋の内側での取り組みとは別に、木戸の外では観衆に稽古が披露されていたが（地取）、これは木戸銭徴収の対象とはならなかったため、地取の観戦を目的に興行の開催場所まで足を運ぶ庶民がいた可能性が示唆された。

<注記及び引用・参考文献>

- 1) 寺門静軒：『江戸繁昌記』克己塾蔵版，1832，1丁，筆者所蔵
- 2) 「江戸庶民」という用語を説明するにあたって、まず類似概念たる「江戸町人」について整理しておきたい。『日本風俗史事典』において「町人」は「江戸時代の都市の商人および職人を総称する階級的または身分的呼称」（原田伴彦：「町人」『日本風俗史事典』弘文堂，1979，p.416）と定義されており，この定義が通説的な見解であるとみなすことができる。ところが，「町人」の解釈は狭義には「名主以下，地主・家主（家守）階層まで」（棚橋正博：『江戸の道楽』講談社，1999，p.11）とする考え方もある一方，最広義には「城下町に居住する人びと」（吉原健一郎：「町人」『縮刷版』江戸学事典 弘文堂，1994，p.198）と定義することができるとされている。このように，「町人」という概念には曖昧さを指摘しなければならないが，本報告では通説的な見解に倣い江戸町人を「近世の江戸に居住し，商工業に従事したもの」として捉えておきたい。しかし，この場合商工業以外の職業に従事した人々（例えば芸人や学者など）が抜け落ちてしまうことになる。そのため，「町人」よりも広い概念として，武士や貴族を除いた一般の人々を包み込んで表現する呼称が必要となる。そこで本報告では，当該の意味内容を含んだ呼称のうち最も用例が多く見受けられる「庶民」を用いることにした。「庶民」は『社会科学大事典』において「貴族などにたいして普通の人々」「支配階層にたいしては支配される被支配者層」「大部分は生産者」などと定義づけられているからである（桜井庄太郎：「庶民」『社会科学大事典』鹿島研究所出版会，1971，p.365）。したがって，本報告において「江戸庶民」とは，近世の江戸に居住し，貴族・武士層を除く階層のもの全てを包括する広い概念として捉え，「江戸町人」もこれに含まれるものとする。
- 3) 例えば，安藤は相撲興行に伴う収益の分析を通して，江戸の相撲人気を論じている（安藤優一郎：『娯楽都市江戸の誘惑』2009，PHP研究所，pp.73－81）。また，『江戸庶民の娯楽』には「相撲は，歌舞伎・吉原と並ぶ三大娯楽となり，庶民生活に根付いていった。」（竹内誠監修：『江戸庶民の娯楽』学習研究社，2003，p.19）と記されている。
- 4) 和歌森太郎：『相撲今むかし』河出書房新社，1963/和歌森太郎：『和歌森太郎著作集15 相撲の歴史と民俗』弘文堂，1982
- 5) 竹内誠：「近世前期における江戸の勧進相撲」『東京学芸大学紀要 第3部門 社会科学』40号，1988.12，pp.201－210
- 6) 生沼芳弘：『相撲社会の研究』不味堂出版，1994
- 7) 新田一郎：『相撲の歴史』講談社，2010
- 8) 高埜利彦：「相撲年寄」「職人・親方・仲間」吉川弘文館，2000，pp.189－228
- 9) 渡辺融：「日本におけるスポーツ観戦の文化史」『体

- 育の科学』49巻4号, 1999.4, pp.279-283
- 10) 『広辞苑』において「棧敷」は、次のように説明されている。
「劇場・相撲場などで、板を敷いて土間より高く構えた見物席。」(新村出編:『広辞苑 第六版』岩波書店, 2008)
 - 11) 『日本風俗史事典』において「芝居」は、次のように説明されている。
「芝居はもと、芝生の上の居場を区別した語で、見物席の称で、のちの土間にあたるが、のちには劇場全体を指し、また、そこで上演される演劇自体をも指すことになった。」(郡司正勝:「芝居」『日本風俗史事典』弘文堂, 1979, p.278)
 - 12) 土屋喜敬:「近世後期の相撲興行と両国地域」『東京都江戸東京博物館調査報告書 第24集 両国地域の歴史と文化』東京都江戸東京博物館, 2011, pp.83-103
 - 13) 木村清九郎:『諸国新撰古今相撲大全』鱗形孫兵衛, 1763, 東京国立博物館所蔵
 - 14) 安藤優一郎:『娯楽都市江戸の誘惑』PHP 研究所, 2009, p.148
 - 15) 「兩國渡船人数調査事蹟」『東京市史稿 橋梁篇第二』東京市役所, 1939, pp.218-226
 - 16) 斎藤月岑編:『江戸名所図会 卷七』須原屋伊八版, 1836, 国立国会図書館蔵
 - 17) 斎藤月岑編:『江戸名所図会 卷七』須原屋伊八版, 1836, 国立国会図書館蔵
 - 18) 渡辺誠:『回向院史』宗教法人回向院, 1992, p.75
 - 19) 歌川広重:『東都名所 両国回向院境内全図』佐野屋喜兵衛, 1842, 東京都立図書館所蔵
 - 20) 勝川春英:『回向院相撲之図』鶴屋, 1762-1819, 相撲博物館所蔵
 - 21) 渡辺誠:『回向院史』宗教法人回向院, 1992, p.75
 - 22) 「嘉永三年庚戌年 勸進相撲興行一件」『寺社奉行一件書類 第9冊 (旧幕引継書)』国立国会図書館蔵
 - 23) 「慶應二年從十二月 勸進相撲興行一件」『寺社奉行一件書類 第41冊 (旧幕引継書)』国立国会図書館蔵
 - 24) 「浅草寺日記」『浅草寺日記 第十二卷』金龍山浅草寺, 1988, p.383
 - 25) 「慶應二年從十二月 勸進相撲興行一件」『寺社奉行一件書類 第41冊 (旧幕引継書)』国立国会図書館蔵
 - 26) 「慶應二年從十二月 勸進相撲興行一件」『寺社奉行一件書類 第41冊 (旧幕引継書)』国立国会図書館蔵
 - 27) 歌川国郷:『両国大相撲繁栄之図』大黒屋平吉, 1853, 相撲博物館所蔵
 - 28) 「嘉永三庚戌年 勸進相撲興行一件」『寺社奉行一件書類 第九冊 (旧幕引継書)』国立国会図書館蔵
 - 29) 日本相撲協会:『相撲大事典 第三版』現代書館, 2013, p.292
 - 30) 二代立川焉馬:『関取名勝図絵』頂恩堂本屋又助, 1845, 相撲博物館所蔵
 - 31) 岡田章雄:『明治の東京』桃源社, 1978, pp.235-236
 - 32) 日本相撲協会:『相撲大事典 第三版』現代書館, 2013, p.46
 - 33) 二代立川焉馬:『関取名勝図絵』頂恩堂本屋又助, 1845, 相撲博物館所蔵
 - 34) 日本相撲協会:『相撲大事典 第三版』現代書館, 2013, p.77
 - 35) 服部幸雄:『大いなる小屋—江戸歌舞伎の祝祭空間—』講談社, 2012, p.69
 - 36) 土屋喜敬:「近世後期の相撲興行と両国地域」『東京都江戸東京博物館調査報告書 第24集 両国地域の歴史と文化』東京都江戸東京博物館, 2011, p.88
 - 37) 二代立川焉馬:『関取名勝図絵』頂恩堂本屋又助, 1845, 相撲博物館所蔵
 - 38) 寺門静軒:『江戸繁昌記』克己塾蔵版, 1832, 2丁, 筆者所蔵
 - 39) 二代立川焉馬:『関取名勝図絵』頂恩堂本屋又助, 1845, 相撲博物館所蔵
 - 40) 土屋喜敬:「近世後期の相撲興行と両国地域」『東京都江戸東京博物館調査報告書 第24集 両国地域の歴史と文化』東京都江戸東京博物館, 2011, p.89
 - 41) 歌川国郷画:『新板角力尽し』芝泉市, 1856, 相撲博物館所蔵
 - 42) 二代立川焉馬:『関取名勝図絵』頂恩堂本屋又助, 1845, 相撲博物館所蔵
 - 43) 『番付』三河屋治右衛門, 1862, 筆者所蔵
 - 44) 歌川国郷:『両国大相撲繁栄之図』大黒屋平吉, 1853, 相撲博物館所蔵
 - 45) 立川焉馬:『角觥詳説 活金剛伝 上』西村屋与八, 1814, 相撲博物館所蔵
 - 46) 二代立川焉馬:『関取名勝図絵』頂恩堂本屋又助, 1845, 相撲博物館所蔵
 - 47) 宮崎璋蔵校訂:『賞奇楼業書第二集 鹿子餅』珍書会, 1914, p.21
 - 48) 二代立川焉馬:『関取名勝図絵』頂恩堂本屋又助, 1845, 相撲博物館所蔵
 - 49) 服部幸雄:『大いなる小屋—江戸歌舞伎の祝祭空間—』講談社, 2012, p.148
 - 50) 守屋毅:『近世芸能興行史の研究』弘文堂, 1985, p.34
 - 51) 高埜利彦:「相撲年寄—興行と身分—」『近世の身分的周縁3 職人・親方・仲間』吉川弘文館, 2000, p.202/和歌森太郎:『相撲今むかし』隅田川文庫, 2003, pp.77-78
 - 52) 一恵斎芳幾:『勸進大相撲土俵入之図』丸屋鉄次郎, 1859, 国立国会図書館蔵
 - 53) アンペール:「幕末日本図絵」高橋邦太郎訳『アンペール 幕末日本図絵 (下)』雄松堂出版, 1970, p.158
 - 54) 斎藤月岑編:「東都歳事記」『日本名所図会全集 東海道名所図会下巻 東都歳事記全』名著普及会, 1975, pp.1-297
 - 55) 二代立川焉馬:『関取名勝図絵』頂恩堂本屋又助, 1845, 相撲博物館所蔵

- 56) 岡田章雄：『明治の東京』桃源社，1978，p.236
- 57) 二代立川焉馬：『関取名勝図絵』頂恩堂本屋又助，1845，相撲博物館所蔵
- 58) 藤岡屋由蔵：『藤岡屋日記』（1856）『近世庶民生活史料 藤岡屋日記 第七巻』三一書房，1990，p.360
- 59) 高埜利彦：『相撲年寄』『職人・親方・仲間』吉川弘文館，2000，p.202
- 60) 大江戸探検隊：『大江戸暮らしー武士と庶民の生活事情ー』PHP 研究所，2003，p.38
- 61) 「棒手振」とは商品を天秤棒で担ぎ，その商品名を呼びながら売り歩く行商人のことである。江戸における棒手振の多くは裏店借や場末の町々の住民であり，都市の下層民の生業として大きな意味を持っていたとされている（南和男：『棒手振』『縮刷版』江戸学事典』弘文堂，1994，pp.282-283）。
- 62) 栗原柳庵：『文政年間漫録』『未刊随筆百種 第1巻』中央公論社，1976，p.298
- 63) 栗原信充：『柳庵雑筆 巻之三』『日本随筆大成第三期 第二巻』日本随筆大成刊行会，1929，p.391
- 64) 鈴木章生：『江戸の職人』青春出版社，2003，p.19
- 65) 栗原柳庵：『文政年間漫録』『未刊随筆百種 第1巻』中央公論社，1976，pp.297-298
- 66) 竹内誠：『長屋』『縮刷版』江戸学事典』弘文堂，1994，p.23
- 67) 武陽隠士：『世事見聞録』『世事見聞録』岩波書店，1994，p.300
- 68) 川添裕：『江戸の大衆芸能ー歌舞伎・見世物・落語ー』青幻舎，2008，p.33
- 69) 「大江俊光記』『古事類苑 武技部 十九（二十）』神宮司庁，1900，p.1166
- 70) 浜松歌国：『摂陽見聞筆拍子』『新燕石十種 第8巻』中央公論社，1982，p.269
- 71) 小野武雄編著：『江戸物価事典』展望社，1989，pp.409-411
- 72) 守屋毅：『近世芸能興行史の研究』弘文堂，1985，p.34
- 73) 和歌森太郎：『相撲今むかし』隅田川文庫，2003，pp.77-78
- 74) 「大江俊光記』『古事類苑 武技部 十九（二十）』神宮司庁，1900，p.1166
- 75) 「旧若松大角力芝居其他興行見聞留書』『日本庶民文化史料集成 第六巻 歌舞伎』三一書房，1973，pp.887-891
- 76) 岡田章雄：『明治の東京』桃源社，1978，pp.235-236
- 77) 二代立川焉馬：『関取名勝図絵』頂恩堂本屋又助，1845，相撲博物館所蔵
- 78) 喜多川守貞：『守貞漫稿』『近世風俗志（守貞漫稿）（一）』岩波書店，1996，p.268，277，308，309
- 79) 寺門静軒：『江戸繁昌記』克己塾蔵版，1832，2丁，筆者所蔵
- 80) 二代立川焉馬：『関取名勝図絵』頂恩堂本屋又助，1845，相撲博物館所蔵
- 81) 日本相撲協会：『相撲大事典 第三版』現代書館，2013，p.253
- 82) 歌川国郷画：『江戸両国回向院大相撲之図』若狭屋与一，1856，国立国会図書館所蔵
- 83) 雷電為右衛門（1767-1825）は現在の長野県出身で，天明8（1788）年に松江藩に召し抱えられ，寛政2（1790）年11月の江戸相撲で西の関脇に付け出される。197cm169kgの巨体と怪力で無類の強さを発揮し，幕内通算成績は254戦10敗2分，優勝相当の成績25回のうち，全勝の場所が7回（44連勝を含む）の名力士であった。（日本相撲協会：『相撲大事典 第三版』現代書館，2013，p.349）
- 84) 岡宏三：『雲州お抱え力士と松江藩の財政再建』『鳥根県立古代出雲歴史博物館特別展「どすこい！ー出雲と相撲ー」』ハーベスト出版，2009，p.116
- 85) 高砂屋浦舟：『江戸の夕映』紅葉堂，1922，pp.89-90
- 86) 「文昭院殿御實紀 卷十』『徳川實紀 第七篇』吉川弘文館，1965，p.169
- 87) 堀米庸三：『歴史をみる眼』日本放送出版協会，1964，p.50
- 88) 高砂屋浦舟：『江戸の夕映』紅葉堂，1922，p.90
- 89) アンペール：『幕末日本図絵』高橋邦太郎訳『アンペール幕末日本図絵 下』雄松堂出版，1970，pp.157-158
- 90) 土屋喜敬：『近世後期の相撲興行と両国地域』『東京都江戸東京博物館調査報告書 第24集 両国地域の歴史と文化』東京都江戸東京博物館，2011，p.90

【付記】

本研究の遂行にあたっては，相撲博物館から貴重な歴史資料を数多くご提供いただきました。当方の無理なお願いに快くご対応いただいた相撲博物館の土屋喜敬氏に，この場を借りて厚く御礼を申し上げます。